

Session III 要旨

フネとカラダ —フネの構造と漕法—

機構共同研究「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」班 代表 後藤 明

本研究班は日本を取り巻く環太平洋海域における伝統的船舶作りの現状について比較を行い、ひいては日本列島の和船、またアイヌ民族や琉球列島の船作りの系譜に新たな光を当てることを目的としている。同時に過去の船造りを考えるだけでなく、なぜ伝統にこだわった船造りが重要なのかを近年世界各地で勃興している「船文化ルネサンス」の脈絡で考えていくことも重要な課題と考える。

本研究班では従来のように民具としての船そのものの形態や構造の比較を目的とはせず、船の乗り方あるいは作り方における身体技法、すなわち身体を製作用具として把え、そして船そのものと身体をどのように一体化させるかを分析するような視点を提示したい。また近年のグローバル化によって船の構造や素材が変容しているが、そのことが船を作りまた乗る人間の身体のあり方にどう影響を与えているのかという視点も併せ持っている。

このような目標のもと本セッションでは、櫂や櫓あるいはパドルといった船の人的推進具の使い方と身体技法との関係を追究する。従来推進具の形態、またその使い方の形式的な比較は行われていたが、たとえば同じ櫓や櫂を同じ人間が状況に応じてどのように使い分けているかといった実践論的議論は少なかった。道具はあくまでその使われ方、また身体とどのように関係性を持つかで分析されるべきという問題意識から、赤羽はアムール川流域、板井は南西諸島の民族資料、また昆は絵画という歴史資料から事例を提供する。それに対し船大工でありカヤッカーでもある洲澤は自ら船を作り漕ぐという実践の立場から、門田は長年船やその操船法を映像化してきた立場から何が映像に残り何が残らないかなどの観点からコメントを提供する。